

の夕方切つて切口を炭火で焼き、一夜の間水中に浸し置くか、左もなくば午前三時から四時の間に切り取り、水に浸けたものは、四五日乃至一週間位保つて居る、然し其他の時に切り取つたものは、忽ち凋落するのが普通である又切口を焼く代りに、之を切り取つた時直に其取口をアルコールに漸時浸せば能く水揚して日数を保つことが請合である

金魚の飼ひ方

都も鄙も艶陽の空長閑になり行き金魚の美しき姿を水に浮かせて家庭の目を娛ましむる季節も真近になりぬ金魚の中には一尾百圓、二百圓と云ふ高價のものあれど是等は姑く別とし縁日杯にて買ひ來る金魚の極手輕なる飼養法に就て農科大學委託試験場秋山吉五郎氏の談を掲ぐべし

▲器物 金魚は極弱いもの、様と思つて居る人もありませぬけれど夫程弱いものではなく夫を殺すのは全く注意が足りないからで御座ります器物は桶でも

箱でも亦硝子の器でも瀬戸を引いた鹽でも構いませんが座敷に置くには硝子のツンドウが綺麗でもあり一番で御座ります。詰り器物は相當の場所さへあれば宜しいので其大きは一尺の硝子のツンドウには五匁位のもの(圓く肥えたもので頭より尾元まで一寸五分、總體で二寸五分より三寸位までなら五六尾、十匁位なら二尾と云ふ所ではより多くなる)狹くなつて好くありません

▲食餌 餌を遣るのは午後より午前中が好いので最も好いのは氣分の最も好い十時頃で一回遣れば澤山で御座ります餌は子子、沙蠶、蚯蚓等一定しては居りません、詰り食ふ物なら何でも好いので駄でも結構です子子なら五匁位のものには一回に五匹位が適當で御座りまして十匁位のものなら八九匹と云ふ割合で御座りまして、餌を五分間位入れて置いて喰ふ氣が無ければ直ぐ揚げて了ひ其日一日は與へなくても差支はありますので斯ういふ時は遣らない方は好いのです能く駄などを入れ放しにして水が白くなつて居る事がありますアレは極好くないのです餌は喰ふても喰はないで

も五分間位より入れて置いては可いませぬ金魚を一番殺すのは餌を遣り過すからで、夕方にでもなつて少し餌を遣り過さうものなら翌朝見ると皆残らず死んで了つて居ます、何でも八分位にして少く遣つて置けば殺す氣遣は御座りませぬ

▲水換へ 夫から水です水を取換へるのは餌を與へてから二時間乃至五時間位経つた時が宜しい餌を與へて直ぐ取換へるのは好くありません、取換へるのは毎日でも一日置き又二三日置きでも大した違ひはありませんが成る事なら毎日取換へた方が宜しう御座ります、入物の周圍に着いて居る蒼い水垢は成る丈け落さない様にして中に沈んで居る塵芥だけを掃除するが宜しい併し硝子のツンドウは周圍に水垢が着いて居つては見苦しいから周圍丈けを落して底だけを殘して置きます尤も無性

の飼ひ方になると毎日餌も呉れなければ水も取換へないでも差支はなく十日も二十日も打捨つて置くとも自然に蟲が生いて夫を喰つて生きて居ります

が夫では飼つて居る娛しみがありません、水の温度は池や大きな漆喰では八十度位までは差支あり

ませんけれど箱や硝子の入物では八十度になると直ぐ弱つて了ひます適度は先づ六十度位の所ですから此温度を見計つて水を取換へて遣らなければなりません

▲氣分 最も氣分の好い時は前にも申す通り九時から十時頃で其時には水中深く遊びで居り、氣分の好くない時は目を覺した明け方で口を半分出してバク／＼して居る時ですが水を取換へた時なども氣分が好いのです又夜になると眠て一定の所に静止し晝でも暗くすると眠つて居ます

▲種類 目下最も愛玩されて居るのは蘭鱒、琉錦、秋錦、和蘭獅子頭、目出錦、朱文錦、和錦、緋目高等では等の掛合には種々の者がありますがザツと其形と直段を申しますと

蘭鱒 頭に獅子頭があつて、胴の圓い背鰭のな
い尾の短いもので普通五錢より七十錢位
琉錦 頭の尖つた胴の圓い背鰭尾鰭の長い物で
五錢より六十錢位
秋錦 蘭鱒と和蘭獅子頭の懸合へ秋山氏の始
て作りたる物で蘭鱒の尾の長い物にて五錢より

一圓位まで
和蘭獅子頭
蘭縹に背縹のあるもので五錢より

五十錢位
出目錦
兩眼の飛び出した俗に支那金魚と云ふ

物で一錢より十五錢位
朱文金
普通の金魚と稱する物青、及其他種々

の斑のあるもの三錢より十錢位
和文金
普通の金魚で一錢より二十錢位

御伽噺の研究

御伽噺の研究

久保田米齋氏談

お伽噺や昔噺類の異本を研究するのは一面道楽なやうにも見えるが、其實少年文學研究上の一要素で、決して疎かにすべきでは無からうと思ふ。で、泰西諸國では、これが研究者も随分多くあつて、其出版物も尠からぬことだが、吾邦では何故か少数の好事家が其異本の蒐集を企てゝゐるといふに過ぎず、文學的研究を試みた人は、寡聞なる

私の耳に二三人を記憶するのみだ。といつて、私自身が文學者の領分に立入り、卒先してこの研究を始むることでは無いが今度私の關係してゐる三越で兒童博覽會を催すのを幸ひ、其機會を利用して平生希望してゐたこの研究に着手するを得たので、狭い自分の研究を土臺として、少しばかり其ことを談して見たいと思ふ。今度私の研究したのは『桃太郎』で、お伽噺といつても随分數のあることであるしなかく一度に彼も此も研究することは到底不可能だ、そこで私は第一着手として『桃太郎』を撰むたので、さて研究して見ると甲から乙へと容易なことでは無い。元來『桃太郎』は延寶から天和の時代に作製されたもので、今から二百五十年餘りも經つてゐる、そして其物語本は二十種内外に及び且つ、中には題名ばかり解つてゐて、内容の不明なものもあるといふ始末、それを詮索するのだから一と通りのものではない。得るに随つて私の讀むものでは、桃太郎が桃の中から生れ出たといふのは新しい方で、最初はさ